討論
ツーリズムがつくり守る水文化とは

【神崎】

それでは改めてよろしくお願いいたします。まず石森さんですが、これからの気宇壮大なアクアツーリズムだけでなく、ツーリズム全体について、方向性を幾つか出して頂いたように思います。ここではブータンをフィールドとしてお話になりました GNH につきまして、補充して頂ければと思います。

【石森】

GNH、グロス・ナショナル・ハピネスですが、これは国民総幸福を目指す。つまり、「幸せをいかに増やしていくか」ということです。GNH はブータン王国の国王様が最初にお考えになったもので、今現在ブータン王国の国家デザインの中心にすえられているコンセプトです。ブータンは人口 80 万人ほどの農業国家です。もしブータンで国富（ナショナル・ウェルス）を上げようとすれば、新しい農機具を導入し、化学肥料や農薬を撒けば収益は上がります。けれど、ブータンはそれをしません。国富を上げようとすることにより、うまく農業が出来る地域と出来ない地域の格差社会を生み出してしまうからです。格差社会の問題は、どの国でも起こり得ます。

ブータン国王は、確かに国富を上げるには、近代文明を導入すればいい。しかしそれによって、国民の間で、家族の紐帯が乱され、地域の連帯が壊れ、地域間の格差が顕著になり、伝統的な文化が軽んじられていく。そんな国になることが国民を不幸せにする結果につながるなら、近代文明の導入は最小限にした方がいい。GNP よりも GNH、国民の総幸福を大切に考えていくことを国是にいます。これは「言うは易く行なうは難し」のものですが、ブータン王国は今、出来るところまで頑張ろうとしております。

それにプラスして、ブータン王国の観光政策も、非常に単純明快です。それは「ハイ・クオリティ、ロー・ボリューム」です。ハイ・クオリティは「質を高く」、ロー・ボリュームは「受け入れる人数を減らす」ということです。これは日本の多くの地域で行われている観光政策と、まったく逆のものです。日本の場合は、「ハイ・ボリューム」「ロー・クオリティ」。とりあえず人を増やす。その結果、提供するサービスは高くなりません。

しかし皆さん考えてください。サービスの悪いところに人が繰り返し行くでしょうか。ですからブータン王国は、近代文明の導入の門戸を出来るだけ狭くしています。従って、受け入れる観光客の人数もロー・ボリュームに留め置きます。しかし訪れた人には、最高級のサービスを提供します。そしてサービスを受けた人は、必ずまたブータンを訪れたくなるのです。しかし日本の場合は、「ハイ・ボリューム」「ロー・クオリティ」です。そういう国は観光立国としては失敗するのではないかと、私は危惧しております。

【神崎】

ありがとうございます。GNH というのは、ブータンではオーザライズされている国の方向ですね。その中に、観光政策として「ハイ・クオリティ」「ロー・ボリューム」が入っている。ならば、「ハイ・クオリテ

ィ」「ロー・ボリューム」とは、例えばエコツーリズムやヘルスツーリズム、あるいはここで話題にしているアクアツーリズムととかなり合致するものですか？

【石森】

いえ。そうでもないです。このように考えているのは、日本のような国だけで、ブータンはいろいろなツーリズムを考えたりはしていません。ですから、「ヘルスツーリズムがあるぞ」、「アクアツーリズム、エコツーリズム、アグリツーリズムがあるぞ」というものではないです。大体 1 週間くらい転々としながら、あるがままにあるがままのものを楽しんで、皆十分に満足している。日本の場合には、それがうまくいかないので、ヘルスツーリズム、アグリツーリズム、エコツーリズム、アクアツーリズムなど、いろいろなツーリズム探しをしているのではないかと思っております。

【神崎】

しかし、ブータンに学べとは仰っていませんね。

【石森】

学んでも無理です。やはり日本とはあまりにも違いがあります。ですから、ただ単純にブータンが GNH の政策をとっているから日本もとれとは言えない。しかし国民の生き方について、本当にお金さえあれば日本人は幸せなのかと考えた時に、お金も勿論ゼロでいい筈がない。ですが、違う価値観もまた、日本人はもっと大切にしていかなければならないのではないか。観光を通してそれを感じる機会を増やしていくべきではないか。そのように考えています。

【神崎】

次に陣内さんには、補充して教えて頂きたいのですが、隅田川の流域でエコツーリズムという言葉を出され、その中には工業遺産も含むというお話がありました。となれば、橋爪さんの大阪の戦前もそれに近い。船の映像の印象的でしたが、やはりそれは水辺のエコツーリズムの中に近代工業遺産を含んだ状態で、それをもう一度確認するというプランでしたね。陣内先生がお話されたものもそういった船上ツアーのイメージでよいのでしょうか？

【陣内】

イギリス、フランス、一部イタリア、マンチェスターなどの世界の色々な都市は、工業化して皆、川沿い、運河沿いに工場を並べてそれが近代産業になり、発展して、本当にお金持ちの都市になった訳です。ところが 1950 年代くらいから皆斜陽になり、1960 年代には操業停止、廃墟という状態です。イギリス病というように、そういう工業都市が没落した訳です。現在、ヨーロッパの都市再生の一番のキーワードはその復権、“元・工業ゾーンをどうするか」ということです。その場合、歴史的な近代化遺産をたくさん利用して、新しいものを作るのですが、非常に意欲的にデザインをしています。そしてアーバンデザインで水辺に人がアクセスできる。規制を緩めたこともあり、そのような成功例が大変多いのです。けれど、なかなかそれを日本に持ち込むのは、簡単ではないと思います。

何故ならひとつは近代化遺産、工場そのものが欧米のように立派なものがそうはない。しかし、最近の日本の若手建築家やその分野に興味を持ち、近代化遺産を再生する活動をしている人たちの動きを見ていると、ほんの何でもないような建物も、非常に面白く使われています。僕は、大阪で道頓堀に連なっている運河沿いを歩いて、たくさんそうしたレストランなどを見ました。蔵や倉庫が素敵なレストランやバーになっている。これがあちこちに起こった訳です。そういう活動は、小さな建物でも可能な限りやっていくべきだと思いますが、墨田区という場所は近代産業発祥の地であり、アパレルや鉄鋼などの業界の蓄積がたくさんあるらしいです。例えば、日本ファッション協会が、ある時期もう一度ファッションを梃子にしてまちづくり、地域づくりをやろうと、桐生や足利、八王子、熊本などで大会をやりました。そういう蓄積と人的蓄積とノウハウとプライドですね。それに加えて、明治以後のレンガや昭和初期のコンクリートを実際に活かすことをやりたいと、ずいぶん盛り上がった時期がありました。東京で言うと墨田区がその名乗りをあげていたのです。

江東区や墨田区にある、かつての下町で生活感覚がありながら産業を育んだ工場、場所。遡れば木場があり、漁業も流通センターや蔵などの施設も江東区はたくさんありました。僕はまだ、そういう場所には蓄積がたくさんあると思うのですが、しかし、それがどんどんマンションになっています。それから含めて考えると、臨海部の品川や芝浦も、今どんどん変化していますが、まだたくさん倉庫がありますね。市場のメカニズムから考えると、バブルの時代はオフィス、今はマンションにどんどん変わっている訳です。すると、第二の多摩ニュータウンが水辺に出来てしまう危険性があるんです。

水辺は、元々非常に多様だったと思います。流通のセンターであり、周辺には漁業もあり、大棚も少し内側に行けばありますし、魚もマーケットもある。遊び場もあり、芝居小屋や茶屋もある。神社のお祭りも水辺で行われる。盛り場もある。そういうものが、都市の魅力を水辺で作っていたと思います。けれどもそれが、ある時期オフィス一辺倒。今はマンション一辺倒になってしまいました。

今度、第二東京タワーが墨田区の押上に出来た場合、周りの地価は当然上がりますので、普通にやると、そこは皆マンションになると思います。そうなると水辺はマンションばかりになり、観光的にも価値が落ちてしまいます。そして将来の多様な展開の足枷になってしまうのです。

そこでもっと色々な機能が備わり、もともとの下町のあり方を現在に発展させるようなプログラムが、地域づくりとしても絶対に必要になります。そこに観光やアートは大いに可能性がありますし、小さな産業遺産、近代化遺産。工場、倉庫でも、十分日本的なやり方で使えます。そしてそれは建物だけの価値ではなくて、周辺も一緒になっての価値だと思います。回遊性です。

少し行くと下町の暮らしが溢れているような雰囲気がある。そして水辺がある。水辺は小さいボートで回れる。あるいは自転車で回るのにも、フラットな土地なので非常にいいです。そういうものを連動させます。また、なかなか面白い商店街がたくさんあります。鳩の街や玉ノ井には記憶があり、面白さがあります。そして、名所や神社がある。お寺がある。ということで、それらを全部結ぶエコツーリズムが大いにあり、そのガイダンスやワークショップの拠点として第二東京タワーの足元に、「環境ふれあい館」というものを作ろうとしています。12 年にオープンの予定です。

【神崎】

ありがとうございました。よくわかりました。ともすると江戸検定に代表されるように東京の観光資源

は、江戸物が優先されています。けれど、近代のそういう工業遺産を含めて、もう一度見直す。それを水辺で活かすことはよくわかります。しかし隅田川に限ってみますと、あのコンクリートの護岸は何とも活かしにくい。阻害要因になりませんか？

【陣内】

しかしあれをスーパー堤防にすればいいかというと、そうでもありません。先程も橋爪さんのお話を伺いましたが、確かに大阪の堂島川や土佐堀川、中之島はパリと似ています。土地の敷地の単位が大きいと橋爪さんも仰っていましたが、モニュメント、近代建築は堂々としたものが建っています。しかし隅田川は外れなので、あまりありません。むしろ猥雑でアウトローの集まりそうな、如何わしい場所も背後にあります。これは沖先生が「水辺には色気が必要だ」「エロティシズムが必要だ」と言われます。パリのセーヌ川にはそれが無くなってしまったのです。16 世紀まではあったそうですが、17 世紀からは、パリのセーヌ川沿いには色気がなくなりました。ですから、娼婦も来ません。これは感性の歴史をされているフランスのアナール派のアラン・コルバン先生を水の文化センターがお呼びした時に、僕も直接お話を根掘り葉掘り聞きましたが、パリの娼婦はセーヌ川沿いには出なくなったそうです。それに対して、隅田川は周辺の面白さがあるんですね。しかしやはり、防潮堤はあまりにも酷いので、何とかしなければいけないと思います。それは隅田川だけではないことが重要です。北十軒川、中川、小名木川、大横川それを全て含めて、荒川用水路まで出られます。

【神崎】

今の問題を橋爪さんはどのようにお考えですか。つまり一度近代化して無くなり、あるいは別なものを作り上げ、それをもう 1 回歴史的に遡って遺産を活かすことを、手法的にはどうお考えですか？

【橋爪】

原則は先程申し上げた通り、いかにもう一度物語を組み立て直して、そこからイマジネーションを広げることが出来るかにかかっていると思います。実物がもう失われていても、その場所の物語が想起できるような新たな風景がそこに生まれれば、私はいいだろうと思います。またもう一つ大阪で今試みているのは、どうしようもないと思われている景観をいかに魅力的に変えるか、という挑戦です。例えば、先程申し上げた堤防の上に民間の方に床を出してもらいます。これは創意工夫で、人によって出すデザインが違います。デッキを張りたいという思いのある方が何人かおられる。そこから新たな試みが始まって、従来と違う堤防の景観が生まれる。あるいは、安藤忠雄先生は、「とにかく緑で全部隠せ。垂直緑化をせよ」と、堤防緑化の活動を提案されている。私が関わっているのは、どうしようもない堤防のところに照明を当てて、線上に堤防のギリギリのところを光らせます。面手薫先生と一緒にやっております。すると、船が来て波が出るとその光が非常に綺麗に揺らめいて、幻想的な風景が生まれます。今年は 100 メートルだけテスト的にやっていますが、これを何百メートルも伸ばしていくと、世界で見たことのない美しい堤防が現れると私は確信をしています。また、他のところでは、芸大生達に割り当てて壁画を描いてもらう活動も今年から始めています。大阪が水の都だと動き出した時に私が言いましたのは、いくつもチャレンジをしてみよう。それが結果どうなるのかを後で評価

して、駄目ならもう一度考え直せばいい。今やらなければならないのは、かつての近代化遺産をいかに魅力的なものに変えていくか。あるいは失われた風景をもう一度今我々が価値あるものとして、どう語り直すのかという時に、できるだけ多くのアイデアと、多くのチャレンジする人を集める。そういう場所を、ここでどんどん提案して実践してくれ。そういう場所が出てくれば変わると思っています。

【神崎】

多くのアイデアと仰いましたが、大阪には言ってみれば「アクアワード」のようなものがあるでしょう。つまり、『なにわ』という水の都を表した言葉がありますね。先程の昭和 12 年のモノクロ映像では『なにわ』は何回も出て来ましたが、橋爪さんの話では一度も出て来ていない。そういう歴史的な重要な言葉をもう 1 回活かそうという論議は出ていないのでしょうか。私は、『なにわ』は、どの字を使うかは別として、水辺から出た大変大事な言葉だと思うのですが。

【橋爪】

私もそう思います。語源は諸説あってよくわかりませんが、海辺に立地して塩水と真水が混じり合っている汽水域に成立した町ということから「浪が速い」。また「難い波」だということで「なにわ」。あるいは、魚が多い場所だから「魚の庭」と書いて「魚庭」など、諸説あります。敢えて今それを使わないのは、この何十年かで「なにわ」ブランドは、非常に大阪の中で印象が悪い。映画などのイメージから、「なにわ」というブランドではなかなか多くの人々の想いが集まらない。また大阪府と大阪市はエリアが違うのです。大阪府というと摂河泉。摂河泉もまた色々と水にちなむ地名があります。摂津、河内、和泉というのが大阪府の元々です。その中の一部が大阪市です。そしてそこが「なにわ」だということです。和泉や河内の人達とともに大阪のブランドをやろうという時に、「なにわ」ではなかなか求心力を得ないところがありました。

【神崎】

色々事情があるのでしょう。陣内のお話も、橋爪さんのお話も、戦後急速な高度成長のなかで、工業化、都市化を急いでみたところで、もう一度立ち止まって環境や観光の問題を緩やかに考えようという方向が出ていると思います。石森さんも同じようなことをお話になりました。石森さんからご両者に何かご質問やご意見はありますか？

【石森】

ご両者には関係ありませんが、今日の討論のテーマ『ツーリズムがつくり守る水文化』に関連して、1つ若者の問題を取り上げさせて頂きたいと思います。このフォーラムを見て素晴らしいと思ったのですが、3割くらい20代の方がおられるんですね。どちらかというとこういうフォーラムは、平均年齢が高くなる。しかし先程から見ておりますと、たくさん20代の方、若手の方がいらっしゃる。これは、僕は大変素晴らしいフォーラムだと思っております。

今ひとつの一般的傾向として、若者の観光離れがあります。観光離れだけではなく、若者のスポーツ離れ、若者の自動車離れ等々という「離れ現象」が顕著に起こっている。国際オリンピック委員

会のロゲ会長の提唱で、2010 年からユース・オリンピックという、若者に限ったオリンピックが行われます。それだけスポーツ離れが深刻ということです。

それと同じように、観光離れも起こっています。私どもの北海道大学観光学高等研究センターで 38 歳の若い准教授がおります。この方は、オタクツーリズムの研究をしています。今「クール・ジャパン」と呼ばれる色々な新しいポップ・アートを若い人達が作っていっています。若者が旅行離れしている、観光離れしているのは統計的事実ですが、若者が自らこだわるもの、オタクとしてこだわるものについては、可処分所得、可処分時間を何とか工面してでも駆けつけるという現象が起こっています。

例として埼玉県の鷲宮町の鷲宮神社があります。元々は観光地でないその場所が、「らきすた」という若者に人気のアニメーションの舞台になったことで、今ブレイクしています。以前の鷲宮神社の年間初詣客は 7～8 万でしたが、昨年は 30 万人を超え、今年は 42 万人になりました。何故ならオタクたちが、鷲宮町に頻繁に来てくれているからです。そうして、その中には愛する町のために、自分も何か尽くしたいという人が増えてきています。

若者が確かに自分のこだわるものに集中しがちである。しかしそれは決しておかしいことではありません。僕は次世代ツーリズムというのは、すべからくオタクツーリズム化していくだろうと思います。つまり、それぞれがこだわるものには、少々のお金とか少々の時間をつぎ込んででも何処にでも出掛けていく。そして他律的なパッケージツアーは、そういう意味でも衰えていくでしょう。これがひとつの総論です。

それから『ツーリズムがつくり守る水文化』との絡みで言いますと、日本人の国民性調査が今年の 7 月に発表されました。これは統計数理研究所が 5 年ごとにやっている調査で、その中で今日皆様方にお話したい点が2つあります、

1 つは今、イライラを感じる日本人が過去最高値になっているということです。特に若者にその増える率が高い。それを考えると恐ろしいのですが、その一方同じ調査の中で、「他者のため、他人のために何かをしたい」という比率が、20～30 代で 50％に近づいて来ています。何をいう訳ではないけれども、他人のために何かをしてあげたい。これは、とっても重要なことだと思います。恐らく団塊の世代以上に若い人の方が、非常にソーシャリティが高い。世のため、利他的な行動に出る可能性が非常に高いのではないかと思います。先程、福岡県の柳川市から工藤治さんから、昭和 28 年まで柳川は清流だったが、上流にダムができて一挙に駄目になったというお話を伺いました。

今私どもの研究ではボランティア・ツーリズムをやっております。若者のボランティアを観光と結びつける動きは、欧米では当たり前になっていますが、日本でも今後、若者の「何か人のためにしたい」という思いを、うまく観光と結びつけると、利他的な観光ではありますが、この柳川のケースのように、そうした水郷を若い人に気持ちを振り向けさせることも出来ると思います。ですから、今後もう1つそれぞれの地域で考えるべきは、若い人たちが関心を持ちえるアクアツーリズムとは一体どういうものなのかということだと思います。そういうことを積極的に考える地域が出てくるべきではないかと考えています。

【神崎】

ありがとうございます。今のお話もその通りであります。陣内さんにもう一つ具体的な事例を教えて頂きたいのですが、南イタリアのトラーニでは、海辺の迷宮的な市街地があれだけ活気を帯びている。漁業観光のペスカツーリズムの話だったと思いますが、そうした流れが韓国あたりまでは来ており、日本にはまだ来ていないということでしたね。例えば韓国は、どういうかたちでそれを受け入れているのですか？

【陣内】

その話は、実は国分寺のカフェ・スローのオーナーから聞いただけなので、確かめていません。スロー・フードの運動は日本でもすごいですね。スロー・フードはもう世界の運動になっていて、文明批評から始まって、なかなか面白いです。日本でも島村菜津さんが、週刊ポストに連載をしていました。

けれど、もう少し地域づくりや観光を広くやっていくためには、チッタ・スローも面白いと思います。トラーニをはじめ、イタリアでは恐らく 10 くらいの地域がこの運動をやっていると思います。鹿児島大学工学部元教授で近代建築研究所所長の松永安光氏がコンパクト・シティや、日本の地方都市を活気づける方法を含めて、ヨーロッパのそうした動きに注目し、イタリアのチッタ・スローを取材して本を出しました。なかなか面白い本です。

日野の話ですが、僕たちもそうした動きを「地域を元気づける」「発見する」、穏やかながら本質をついた素晴らしい活動ではないかと思い、学ぼうとしています。そして法政大学と日野市が連携して、事業として地域の発見しています。また職員が面白がって参加できるように、職員研修や塾をしよう。提案もしようと、色々なことをやっています。そのなかで、国分寺のカフェ・スローに行って皆で食事をしました。そこは、食材を活かし、自然素材を使ったお店で、そこもやはり倉庫なんですね。倉庫を改修したなかなか面白い、イベントも出来る、交流の場です。

ですから地域のことを発見し、興味を持つ人が集まってくるような場所が、あちこちに出てくるのが重要だと思います。素材はやっぱり、地域のものを発掘するのが一番面白い訳です。橋爪さんも仰ったように、色々な人達が集まって、クリエイティブな、今までとは少し違った目で見ることが大切です。

機関誌「水の文化」も、今までの水を語る語り口とは少し視点が違いますね。同じ水でも違う見え方や、今のことを深く考えるきっかけがある。恐らくカフェ・スローなどに集まって、色々なことをやろうとする人は、今まで眠っていて気付かなかったものを、人と人とを結びつけ、新しいチャレンジをすることで、発見しようとしていると思います。僕は、そういう活動を墨田区でもやりたいと思っています。ですから、「環境ふれあい館」を、第二東京タワーの下に作りました。そこはまさに人と人とが出会う場所、ワークショップ。そういう場所にしていきたいと思っています。

【神崎】

それはわかりますが、トラーニの事例は、一度沈みかけていた1つの水辺の街区が、また生き返ったという事例ではないですか。そこに近郊の人達が、ウィークエンドの夜に出てくる。そういう事例で

いいますと、私がよく知っているのが、台湾の淡水です。台北から地下鉄が通じ、台北から人が来るようになりました。ですから今日、私はトラーニの話を聞き、「あ、淡水だ」と思ったのです。考え方の問題ではなく、ある程度古い遺産があれば、それを使って何かを起こすというのは、自然発生的にも出るものではないでしょうか。

【陣内】

出ます。ただ、意志を持ってやる人が集まって来ないといけません。

【神崎】

それから、橋爪さんがおっしゃったのは、法的な規制がどうなのかということですね。やはり日本の場合はまだ厳しいと思いますね。

【陣内】

そうです。さっきのトラーニは一例としてお話しただけで、ああいう事例がいっぱいあります。最近の南イタリアは、どこの町もそうなっているんです。

【神崎】

それがたくさん同じように出来た時に、どう飽きられるかという問題もこれからあると思います。

【陣内】

しかし元々の素材が皆違うので、違いを皆強調します。日本の場合は、あるモデルが出来ると皆、視察に行って、同じようなことをやろうとするので、金太郎飴のようになる。やはりプライドですね。橋爪さんがあれだけ大阪にプライドや愛着を持って熱く語る。小さい町でもそういう人がいっぱいいる筈です。それが重要だと思います。

【神崎】

日本の場合は、刺激を受けたらもう少し独自にそれをどう動かすかということを考えなければいけないというご示唆でした。橋爪さん、上海万博では大阪をどのようにアピールするのですか？

【橋爪】

上海万博は来年 5 月から半年間です。上海万博のテーマは『ベター・シティ、ベター・ライフ』。万国博覧会の歴史の中で初めて都市がテーマになります。生活がよくなれば、都市がよくなるという意味合いです。ですから上海万博には、万国博覧会史上初めて、都市だけのエリアが出来ます。世界五十数都市がそれぞれ競い合います。そして日本からは大阪だけが出展します。共同展示館の中に私が関わっている大阪の展示があります。隣がスペインのビルバオ、斜め向かいがパリ、真正面がチューリッヒという状況で、「わが町は素晴らしい」と謳います。その都市のエリアのテーマは、「世界の都市の中で、極めて優れて素晴らしい試みをしている事例を、それぞれ紹介しましょう」ということ

です。ビルバオでは、アートによって工業都市が文化的な町に変わったことを紹介すると思います。我々大阪は、「大水害を防ぎながら水とともに我々は生きてきた。これからも環境に配慮した町づくりをする」という強いメッセージを出したいと思っています。私のこだわりに、例えば大阪の都心部の川沿いの桜並木があります。造幣局のところに、遅咲きの八重桜の様々な種類が百何十種類もあるんです。春になるとそこを通り抜けるイベントが行われます。最近、船を浮かべて、川から川岸の桜並木を見る人も増えています。百数十種類のまったく違う桜が川岸に植えられている光景は、完全にフィールド・ミュージアム、オープン・ミュージアムだと思います。とても素晴らしい光景ですが、それを大阪の人達は、世界から見て誇れるものだとは語らないのです。毎年、年中行事として、季節が来たら桜の通り抜けに行こう。そのまま何となく花見をして終わっている。それを外に向けて、もう一度水際のオープン・ミュージアムとして考えたい。そこには桜は我々が先人から受け継ぎこれからも大事にするものだ、ということを外へ向かって伝えたいという思いもあります。

また豊臣時代の大阪の屏風絵が、最近発見されました。それを見ると、まさに様々な生活が水際、川で行われている。その風景には、京都の町から始まって、平等院などが描かれ、淀川の流れがあり、大阪に入って水際に町が出来た。そして堺の方まで描き込まれています。堺も港町でした。まさに大阪の町とは、水を大動脈としながら、水とともに生きてきたことが映っている屏風です。これがオーストリアで見つかったんです。

【陣内】

あれは、洛中洛外図のように見えたんですけれども、大阪の屏風だったんですね。

【橋爪】

大阪です。上海万博では、そのレプリカを今回展示してもらおうと思っています。ただ、それだけではなかなか人が来ませんので、幾つか隠し玉も用意しております。公にしておりますのは、世界で最大の金の大判などですね。そういう展示をいたします。

【神崎】

もしご興味のある方がいらっしゃったらどうぞ、橋爪さんを訪ねてください。先程の映像には、橋爪さんが仰ったように、実に貴重なシーンがありました。それは船上生活者です。瀬戸内では家舟といったと思います。香港では蛋民ですね。私は、海や湾を利用しての色々な生活形態とは記憶にしっかり留めなければ、永遠に失われる部分だろうと思います。つまり、失われた日本人の1つの原風景だろうと思います。ですから、橋爪さんはぜひ、あの記録を少し集めて、集大成して次へ残すことをやって頂きたいです。

それではここで、フロアの皆さんからもご協力を頂きたいと思います。ご質問、ご意見がございましたら、ご遠慮なく手を挙げて頂きたいと思います。

質問者 A

今日は、観光対象としての水を基本的には見るもの、神崎先生だけが飲むものと捉えられました。しかし水は時には汚いものであり、臭うものです。先日、堂島川沿いを散歩して、水都大阪 2009 も覗きましたが、堂島川は臭いました。この臭いはもう許容範囲なのでしょうか。それとも、ロの字の水の臭いには、「このくらいにしたい」という目標値や基準値のようなものがあるのでしょうか。観光は、臭いが非常に大きな意味を持ってきます。また江戸時代の京都は非常に臭かったそうです。それは肥料を使っていたからです。綺麗な井戸水と臭い肥溜めが共存していた訳ですね。それをどのように考えるべきか。ぜひ橋爪先生、神崎先生、よろしくお願いいたします。

【橋爪】

今回のプログラムには、色々な船で、子ども達にも川に出てもらおうと考えているものがあります。例えばイー・ボートも出していますし、カヌー体験のようなものもやっています。ただし大阪でそういうプログラムをやる時には、子ども達に「口に入れてはいけません」と、注意します。また中之島では噴水を上げています。あれは川の水を 30 分で汲み上げて、浄化して 5 分間だけ打てます。水道水ではなく、川の水を浄化しています。ただし私や安藤先生は、最初もっと高い噴水を考えていました。風が吹くと噴水が流れて、陸まで霧のように来ます。その場合、いかに浄化しているとはいえ、頭から汚水を被ることになります。それで噴水のデザインも決めました。先程見て頂きましたように 30 年前から比べると、はるかに大阪の川も綺麗になりました。しかしまだ工業用水が上流から入ってくる部分もあります。生活汚水や高速道路から出る雨水がそのまま川に落ちています。それでは物理的に綺麗になりようがない。その限度はあります。ただし、道頓堀などは、さらに大きな下水道を作ろうとしています。地下にもう一つ川を作る訳ですね。これによって見えている川の部分は、何年か経つとかなり綺麗になる筈です。少なくとも、しぶきを舐めた程度で「大変だ」というレベルの現状では、私は「水の町」だ言うのは厳しいと思います。

一方で、栄養が良過ぎるために、毎年色々な水草が湧き、今は特に外来種のウォーターキャベツが大量に湧いています。それをお祭りの時に駆除するのが大変です。上流へ行くと、そのウォーターキャベツを食べるヌートリアがさらに繁殖しており、訳のわからない生態系が出てきています。この辺りでも、ボランティアで川を本当に綺麗にする人達がたくさん出て来て頂いていますが、しかしそれ以上に何か技術的な面での浄化の工夫やアイデアが、もっと必要だと思っております。水そのものの専門家ではありませんので、数字などはわかりませんが、少なくとも徐々に変化して綺麗になって来た。そして、これからますます綺麗にするために、多くの力を、知恵と技術を集める。そのためには、どれだけ川が大事だという思いを持っている仲間を増やせるのか。ということで、今回のイベントを開催しています。要は仲間を集め、石森先生の言葉を借りますと川に関するオタク、川に関するマニアックな人達をどれだけ増やせるか、ということを大阪ではよく話をしております。

【神崎】

私は簡単にお話しますが、臭い匂いというのは耐え難いものでありまして、これは明治以降日本に来た外国人がしばしば書いております。江戸も京都も大阪も臭かったろうと思います。しかし、その

まま甘んじていたことはありません。その時代で最大の工夫はなされたと考えます。例えば風水師、家相見は、水脈をきちんと見ないと成り立たなかったんですね。我々は家相見というものは、つい方角だけのように思いますけれど、地下水の水脈で、井戸と便所の位置関係というのは非常によく見ていると思います。それは科学的に、今の科学的な知識ではありませんが、その時代の相応の工夫はしていると思います。それから、私達が知っている範囲でありますが、日本は杉の利用が盛んでありました、杉の葉っぱをトイレへ落とす。トイレの周りに南天を植える。今のトイレの防臭剤に比べれば、どれだけの効用があったのかは別としまして、やはりこのような様々な工夫をしたんだろうと思います。今の我々が臭いと感じるのと、慣れたところで諦めた臭さは、少しは気分的に違ったのではないかと思っております。

質問者 B

前の方と少し共通していますが、私は佐倉の者ですが、私どもは印旛沼の観光をよくしよう。あわせて印旛沼エコツーリズムをやろう。船を出し、それをさらに発展させて行こうと考えています。しかし印旛沼はいわゆる水の基準の COD が、平成 19 年度ワースト 1 なんです。水道水源としては二十数年ずっとワースト1です。夏になりますと青子が大量に発生しています。そうしたなかで、実は去年取手から銚子まで 19 市町村が「利根川舟運・地域づくり協議会」立ち上げました。そして私達も利根川と印旛沼は関係が深いことから、印旛沼の舟運をこれからの時代に対応していこう、発展させていこうと考えています。そこで一番大きな問題になるのが、COD ワースト1、夏になると青子が大量に発生することです。この状況で、舟運を絡んだエコツーリズムが可能なのかどうか。非常に一番大きな課題でございます。それを陣内先生と石森先生にお聞きしたいと思います。

また私ども印旛沼周辺は多くが遊休農地です。今農家が非常に疲弊し、田んぼ農家や畑農家が高齢化もあり、遊休農地が大変多くなって来ています。そのことから、これからは例えば米作りのツーリズムを確立したいと考えています。5 月に田植えをし、草取りをし、9 月に収穫するという観光型、長期滞在型のツーリズムをぜひ確立して行きたいと思っています。石森先生には、その辺りの課題についても、ぜひお聞きしたいと思います。

【陣内】

水質改善というのは根本的な問題です。水循環の仕組み全て、あるいはその周辺の市街地や農地や農薬が全て含まれると思いますから簡単ではありません。それはまさに水循環の専門家とのコラボレーションだと思います。僕は専門ではないのでわかりませんが、例えば東京でも、日本橋川などの中心部で、やはり水質をもっとよくしようと考えられています。同じように青子が発生してしまうんですね。

また神田川は、上流は目白の方から来て、それが水道橋のところで二手に分かれ、一つは東へ向かい御茶ノ水の辺りを通って隅田川へ流れます。もう一つは日本橋川といい、日本橋の方へ入って行きます。そこに皇居の周囲を一周している外堀があり、その水循環が非常に悪いんです。堰のようになっていて、段差は地形を利用していますので、水面のレベルが段々下りていき循環をする訳です。循環がよければ非常に上質の水が下りて行きます。しかし、今は循環が悪いです。元々、この

地域には湧水たくさんあり、外堀にも水が潤沢に供給されていました。玉川上水の水も四谷辺りで、そこへ入っていたという話です。しかし今は、それが皆切れてしまい、雨水や地下鉄の構内に湧く水も入れようとしましたが、水質が悪いのでそれもなかなか出来ない。そこで、水循環をどうするかという根本的な問題を解決しなければ、日本橋川はよくならないと言われています。それから、神田川も処理水を上流で入れてかなり水を補給していますが、それについても、もっとクオリティを上げなければいけないと聞いています。

ともかく、日本全体でそういう問題はあります。勿論、下水道が合併式で、雨が大量に降るとトイレの汚物がそのまま流れてしまう問題もあります。内堀も、外堀もこの問題があります。神田川にもあると聞いています。

印旛沼は、周辺がどのくらい宅地化、近代化しているか私はわかりませんし、農業ゾーンから出てくるものが流れ込む問題もあると思いますが、例えばベネツィアの場合にも、やはり同じような問題があります。ラグーナ、ラグーンの海が周辺の大陸の開発によって汚れてしまい、夏場になるととても臭かったんです。それこそ耐えられないくらい。91 年に 1 年間いた時も、私は夏場、深夜 4 時頃、臭さで目が覚めました。それが最近、皆の努力と規制があって、よくなって来たと思います。ですがこれは、土地利用の誘導や規制など、かなり大きな範囲の問題で、今日いらしている沖大幹先生などの専門家に、答えて頂きたい大問題だと思います。

【石森】

私は水質の問題はよくわからないので、ツーリズムに限定してお話します。ご指摘の印旛沼周辺には、特に遊休農地がたくさんあるということです。僕は、民主党政権に農地改革を期待しています。団塊の世代に調査をしますと、農的生活、田園的生活を希望する人が 50%を超えているんです。しかし、実際にそれになかなか踏み込めない。その理由には、農地が簡単に手に入らないことがあります。最近、日本の各地で農業法人が色々なかたちで動き出していますが、今せっかくの農地が放置されています。その一方、日本国民のかなりの数が、もしチャンスがあれば農的生活をやりたいと思っているのです。

勿論、これは誰でもすぐにはできないと思います。しかし地域がきちんとサポートのシステムを確立し、幸い首都圏が好配置にありますから、そういう地域でまずは二地域居住を促進する。一気に二地域居住というのはなかなか大変ですので、それ以前に今ご指摘のエコツーリズムのようなものを、うまく絡めるかたちで、まずその地域に興味を持ってもらいます。また地域の側では、例えば天草などは、地域の森林組合と連携して独自に木を切り出し、500 万円くらいでログハウスと1ha の農地を月単位でリースしています。人々はそこへ殺到しているんです。地域では実際に人手が足りません。また、農的生活を求める人達は誰かのサポートがなければ、農的なことは出来ません。ですから地域の農家と連携するかたちで、新しい試みをどれだけ導入して行けるかが重要です。そのために今、私どもの研究センターは NPO 法人「ふるさと回帰支援センター」と連携して「ふるさと起業塾」というものを立ち上げております。主として若い人を対象に、農林水産省の人材育成事業に「田舎で働き隊」というものがあり、これは一人あたり月に 7 万円。また総務省にも同じような事業があり、こちらも月 7 万円。合計 14 万円をもらいながら、地域で何かの仕事を手伝いつつ、ふるさと起業塾で生業起こ

しを学んで頂くということも始めました。

戦前、日本人で雇何処かの会社や企業、団体に雇用されていた人は 4 割を切っていました。今現在、雇用されている人は全体の 85%です。ですから、自営業をどう増やすかということも重要です。かつては日本にも農業者を含め、多くの自営業者がいて、色々な生業がありました。しかし今では85%が務め人なっています。その辺りに、やはり日本の弱さがある。そこで政府は今、雇用促進をいろいろなかたちでやっている訳です。しかしそれも、なかなかうまくいかない。何故なら、雇用が日本でそう次々に増える筈はありません。それどころか、実質的雇用がより少なくなり、より不利な条件で働かされる人が出て来ます。それならば、条件を整えることによって、遊休農地を多く抱える地域で若者の生活が成り立つようなシステムを日本各地で皆協力しあって生み出していくことが、大切ではないでしょうか。ですからツーリズムを先行的に考えるのではなく、むしろ生活の全体を地域で考えるなかで、自ずとその地域で出来る観光のあり方も決まってくると思います。

【神崎】

ありがとうございました。直接的な妙案は、そう簡単には出ないと思いますが、ご参考にしてください。次の方、お願いします。

質問者 C

石神井川は、板橋区の中に流れていまして、水源はほとんど小平市です。小平市から練馬区、板橋区、北区を通って隅田川へ流れる川です。その水はほとんどが湧水で、きれいなものです。しかし、ご多分に漏れず、ゲリラ豪雨があった時には下水処理が間に合わず、大量の下水が入り込み、10 メートルもある高い要壁が水でいっぱいになります。しかしそれは長時間ではなく、わずか 2～3 分でですね。その間に、全てのものが押し流されてしまう訳です。ですから、一生懸命魚を育てようとしても、水草を育てようとしても、その 10 分で、全てがご破算になってしまう訳です。東京の上水道は、大変上質の浄水です。しかしその浄水でトイレの水を流し、車を洗い、掃除にも炊事にも使っています。炊事は仕方がないとしても、必要のないところにまで、そうした上質の水を流している訳です。もっとも、今更旧水道をつけるのは大変かと思いますが。そこで自治体等に頑張ってもらい、各戸に貯水槽をつけてもらえればと思います。それは屋根の上ないし壁に 10 分間程度の大雨が降った時、少し水を貯めておくだけのものです。それがあれば、結構楽になると思います。また川は要壁に仕切られており、水に親しもうと言いますが、実際にそれを覗くのは大変です。高い要壁をよじ登り、フェンスを越して、見なければいけません。

【陣内】

この間、墨田区と雨水の専門家の村瀬誠さんと東大のそうした分野の先生が中心となり、「雨水都市」という国際会議を 1 週間、東大と墨田区で開催しました。僕はそこで非常に感銘を受けたんです。そういう問題に世界でチャレンジしている。一方で、水がないと困るけれども、その一方でやはり水が多すぎる。その雨水をもっと循環させよう。あるいは、雨水は心配なく飲める。そういう啓蒙活動の必要性から、韓国の若い映像作家が、本当に面白い、本当に感動する映画を作りました。また韓国の

ソウルの大学教授は、ビルの地下に貯水槽を皆作る、とてもダイナミックな提案をして、行政側とコラボレーションしているんです。そういうことを、日本も真剣に考えなければいけない。各家庭で小さな貯水枡、この努力は大変ですけれども、もっと大きなことをしなければと思いますね。雨水都市という概念は重要なテーマだと思います。

質問者 D

私も今の方と問題意識は同じです。もう一つ加えますと、私は杉並・世田谷に長く住んでおりますので、今の川の原景を覚えている訳です。小学校・中学校ぐらいまで、成城や杉並区にある今の三面張りの川が清流であった記憶がある訳です。しかし今、その川が醜悪な存在になっていることに、私自身、非常に喪失感を覚えます。そこで先進国の中では、この問題をどうしているのか。こうした水辺空間のない国際的な都市はありえるのかを伺いたいです。

【神崎】

それについては、私が簡単にお答えします。ソウルが今、その取り組みに一部成功いたしました。今の大統領がソウル市長の時に、川に蓋をして道路にしました。しかしそれをまた、大統領になった後には、道路を剥いで川に戻しております。ソウルの真ん中にそうした川辺空間が出来ており、人が集まるところになっているんです。近代化のなかで私達がやっていることには、相当無駄が多いです。1 回作ったものをもう 1 回壊す。埋めたものを、もう 1 回掘り起こす。そうしたことを繰り返していますので、それが醜悪に見えたり、再整備されて美しく見えたりしているのではないでしょうか。ソウルは1つ、その意味では参考になると思います。1 人の政治家が蓋をして、またそれを剥ぐ。これは、日本も真似をしなければいけないのでしょう。特に東京の小さい河川については、私もそう思っております。

そろそろまとめなければなりません。最後に一言ずつよろしくお願いいたします。

【石森】

民主党政権が成立して、僕は観光政策がよりよいかたちで変わることを期待しています。何故なら、自民党政権における観光政策は、単純に言いますと、旅行業・宿泊業・運輸業を中心とした運輸行政の一環としての観光行政、観光政策でありました。しかし大臣就任記者会見の際に、前原誠司大臣は、内閣総理大臣の指示書、命令書のようなものについて話され、「民主党政権による観光政策は、基本的に地方公共団体や住民が主役となった観光政策を支援する」と言っています。よって、旅行業・宿泊業・運輸業が主役であった観光政策から、地方公共団体や住民が主役の観光政策にシフトする。これは大変象徴的です。先程橋爪さんが、シビック・プライドについて話されていました。これは市長がプライドを持っても仕方がない。市民がプライドを持つかが重要です。そうした意味で、僕はこのシフトに大変期待しています。

もう一つ重要だと思うのは、観光をどう振興して地域を活気づかせるかということです。観光は時間が掛かります。先程、陣内も観光振興を図るためには、地域の農林水産業がきちんとしなければ駄目だと言われていました。まさにその点が、日本には欠落してきた訳です。今まで日本は、目先の観光振興だけを考えて来ました。例えば、農工商連携促進事業というものが、既に行われています。

四百数十億円が投入されて、農業・工業・商業を絡ませて地域の活性化を引き起こそうとしています。ヨーロッパでもそうした農工商の連携が行われおり、その中心に観光が座っているんです。それは、観光抜きには地域の農工商連携は基本的にありえないということです。それに対して、日本は観光抜きの農工商連携が当たり前になっています。ですから民主党政権に変わって農工商連携促進事業を、農工商観光連携促進事業に変えることができるかどうか。そこに注目されるのも、1つの見方ではないかと思います」

【神崎】

今のお話に1つ私も加えます。小布施という町が長野県にありますが、小布施の今の町長は、市民を含めて観光客を呼ぶつもりはない、観光客を呼ぶつもりで町づくりをしたのではないと公言なさっています。これは観光客が来るようになったから言えることですが、やはり自分達の町づくり、自分達の水辺。小布施も大変水を大事にしています。例えば酒造りなんていうのも一度仕様を変えたくらいです、そういうことで、地元が何を考えるか。地元がどう自立するか、プライドを持つかということは、おっしゃる通りであります。観光というのは先にあって、なかなかうまく進まないのではないかと私も思っております。

【陣内】

“何でもないものに発見を”というところからスタートして来ましたので、それで締めたいと思います。東京には江戸名所図会というものがあります。何でもない場所が名所として描かれていることに、非常に興味があります。都市の中のさりげない場所を楽しみながらまわる。そして美味しいものを食べ、縁日に参加し、色々な経験する。味覚、五感を楽しむ。そういうところには、しばしば水辺も描かれています。そういうスピリットは、日本人の中に今もあると思うんです。しかし、それがずっと忘れられて来た。しかし今、ようやくチャンスが巡って来ています。これは佐原や柳川といった場所だけではなく、どこにでもあると思います。東京の中にもたくさんあります。目黒川沿いや神田川沿いの一角も、三面張りですがようやく復活して来ています。スロー・シティから言いますと、もう一つ重要なことは、水辺の空間は時間の流れが非常にゆっくりでいいということです。そういう点でも、水辺を復活させるというのは、非常に重要だろうと思います。

【橋爪】

イベントの会場でいろいろな方と話をいたします。例えば、米米クラブで活動されたアーティストの石井竜也さんと対談する機会がありました。彼の話は、とても印象的でした。オーストラリアのアボリジニーは、宇宙の感じ方が我々と違うというのです。我々は、宇宙は上の方にあり、広がっているものだと考えます。しかしアボリジニーは、肌膚の我が皮一枚以外が全て宇宙だと語ります。「私は自然の中に生きている」ないし「生かされている」ことを、彼らは直感的、経験的に言葉として語れるのです。

また石井竜也さんとは、大阪の水の話をしました。目の前にある大阪の水がどこまで繋がっているのか。大阪の水から世界のさまざまな水文化に思いを馳せることができるのか、ということを、我々は

問われているんです。私は大阪でその実践をしています。自分の実践は、やるほどに世界に思いを広げられる試みでなければいけないと思います。今回のプログラムには、子ども達がたくさん来て、遊んでくれています。しかしそれは、目の前の川が大事だというだけでは駄目です。世界には、飲んでは駄目な井戸水を飲んでいる子ども達が今もたくさんいて、水が原因でたくさんの子ども達が、幼い間に死んでしまっている。そういうところまで、わが町の子ども達に伝える役割も、川は担っている筈です。ぜひ、次の世代の子ども達に水の大事さを伝えるためにも、わが町のことをきっちり見てもらえる現場を、たくさん作っていくべきだと思います。

【神崎】

ありがとうございました。今日は、アクアツーリズムという新しい方向性をここで打ち出しました。しかしこの方向性がどちらを向いてどうだ、ということは当然言えません。これから皆様方と、なお時間を掛けて、こうした問題に取り組んでいかなければならないだろうと思います。ここで最後に私から提案があります。私達日本人は、特に水の神を大事にして来ました。火の神と同じように大事にして来ました。「水の文化」のバックナンバーの中にも、ちゃんと神様を取り扱っております。今時、こういうテーマ設定をする文化活動はありませんので、私は深く敬意を表したところであります。しかし私達人間が、たかだか近代化の中で科学的な知識を持ったからと言って、水を治めることは出来ません。昔から治水は大事な問題ですし、防水も大事な問題でした。ところがやはり人知の及ばないところへ、そのような自然の恵みがあるという気持ちだけは、何処かへ私達は持っていなければならない。人間の傲慢さでそうしたことの全てが、管理でき、方向付けられるものではない。そこで時々は水の神様を思い出して、こういう問題を論じたらいかがでしょうか。これは宗教問題ではありません。日本の八百万の中の1つの自然を尊ぶという、その気持ちです。少なくとも私個人は、それを大事にしたいと思います。どうぞ、お考え頂ければありがたいです。これで終わりにします。皆様方のおかげをもちまして、今日は楽しく過ごすことができました。充実した時間でありました。ありがとうございました。